慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 小林端五著 工場法と労働運動 |
| Sub Title | |
| Author | 小松, 隆二 |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1966 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.59, No.10 (1966. 10) ,p.1157(133)- 1158(134) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19661001-0134 |
| Abstract | |
| Notes | 新刊紹介 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19661001-0134 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 新刊紹介

猪谷善一著

## 『西洋経済史』

著者は経済史の長老であるが、このしばらく学界から遠ざかっておられた。本書を読むにあたり、この点は十分配慮されてしかるべきと信ずる。最近わが国における学問研究の発展は著しく、西洋経済史と題する著作も数多いが、本書がそうしたなかでどれほどの位置を占めるかについては読者の賢察に待つほかない。私はといえば、著者自身、同学者の研究を摂取し、それを内容に盛込むべく努力したというものの、そうした作業が長老ほどの著者にしてなお十分でなかったという事実に思いをはせざるを得なかった。私自身今後この種概説書の執筆を考えているわけであるが、前途の困難さを知らされた感がある。学界の諸成果をふまえて立つというものの、結局のところ掛声だけに終るのではあるまいか。いわばそうした不安であるが、長老ほどの著者にしてこれが克服できなかった。著者の能力にかかわる以上に一考を要する問題である。一体個別研究というものはすべて一貫した流れを理解させることに向けらるべきと思うが、現実に物の用に立たないとすれば、個別の業績の打出し方こそ問題ではあるまいか。一般に個別研究をふまえて通史が書かれているとは思えない。その限り平常の営々たる努力を学界の共通財産にまで高めることはむずかしい。本書を手にした時、私はそうした淋しさを深く感じたのであった。

構成だが、一般に概説書においてこれは内容に先立つ以前にその評価を決着する鍵となる。経済史で何を理解したらいいのか。担当者はつねにこれを念頭に置くべきであり、それを果すべく何が盛られるかは重要な問題であった。以下に私は目次を並べるわけだが、もっぱらそうした観点からであった。第一章経済史学の発展、第二章経済史の研究、第三章経済階段説、第一節経済階段説の意味、第二節リードリッヒ・リスト説、第三節ブルー・ヒルデブラント説、第四節カール・ビュヒァー説、第五節グスタフ・シュモラー説、第六節ウェルナー・ゾンバルト説、第四章村落共同体、第五章封建社会、第六章都市経済、第一節都市の成立、第二節ドイツ・ハンザの盛衰、第七章絶対主義、第八章フランス革命、第一節ブルジョア革命と啓蒙哲学、第二節ブルジョア革命と社会経済的背景、第三節陳情書に現われた社会階級の要望、第四節一七八九年、第五節フランス革命の成果、第六節フランス革命と明治維新、第九章産業革命、第一節産業革命の研究、第二節機械の特色、第三節田園工業、第四節紡績革命、第五節工場制度、第六節アメリカ合衆国の産業革命、第七節朝鮮の産業革命、第八節イギリス産業革命と日本産業革命、第十章自動車工業の発達、第一節自動車の世界生産、第二節アメリカ自動車工業、第三節イギリス自動車工業、第四節フランス自動車工業、第五節西ドイツ自動車工業、第六節世界における競争の激化、第十一章世界貿易の歴史的発展、第一節古代貿易、第二節十九世紀における躍進、第三節第一次世界大戦と貿易、第四節世界経済恐慌と貿易、第五節第二次世界大戦以降における世界貿易の発展、第六節世界貿易における構造革命。知られる如く、内容は多岐にわたる。西洋経済史という首題を越えたと思われる部分もあるが、かえってこれは学界のそとに身を置いた著者の多彩な境涯を反映しているものとして興味深い。それらをも西洋経済史の範囲に投入すべきか。著者の積極的な姿勢とも受取られると思うのは一人筆者の身勝手であろうか。（税務経理協会・昭和四一年二月刊・A5・二〇七頁・六五〇円）

—渡辺　國廣—

H・クラーメル著
大石泰彦訳

## 『確率論入門』

統計学の入門書も現在かなり多く出版されているが、今回クラーメルの確率論が翻訳された。訳者のはしがきにあるように、「こんにち統計学の応用はますます広がってきており、どのような学問の勉強に携わるにしても統計学の知識はそれこそ多ければ多いほど好ましいのであるが、根底事項としては本書にもられている範囲の知識を確実に身につけていさえすれば十分である」と考えられるのである。本書は三部からなっており、第1部、基礎理論、第2部、確率変数と確率分布、第3部、応用、と分れている。第1部では確率論の歴史と、確率計算があつかわれ、第2部では現在あつかわれる各種の分布とその性質がとりあつかわれる。正規分布を中心に二項、ポアソン、$\chi^2$（カイ）自乗、t、F分布等が説明される。第3部では統計的応用が示され、推定と検定の問題、分散分析、品質管理等が示されている。この目次の項目だけをみれば、他の入門書と変ったものではないが、問題はその内容であろう。日本の書物の多くが、頁数の関係もあるが、数式的説明に追われて内容の説明が初学者にとって難解であり、また例題、練習問題も数少ないのに対して、欧米の書物は説明が十分になされ、豊富な練習問題とともに解答が用意されている。数学の専門家でない者にとってはただ数学的説明をされても内容を理解しにくいが、実例を示され、練習問題を解くことによってその内容をつかむことができる。本書もその点十分の用意がなされている。現在、入門書として、ウイルクス（林周二訳）初等統計解析、とホーエル（浅井晃、村上正康訳）初等統計学が代表的なものであるが、ホーエルは全然数式を使わず、ウイルクスは若干使っているが、その程度では不満という人々にとって、本書は先に翻訳され、現在絶版になっているホーエルの数理統計学入門に近く、その程度、あるいは中級をねらう人々にも充分満足をあたえてくれるものと思われる。（東洋経済新報社・A5・三一八頁・一六〇〇円）

—佐藤　保—

* * *

小林端五著

## 『工場法と労働運動』

近代的社会政策立法の第一歩である工場法については、これまで十分な研究がなされずにいたが、本書はそのような空白をうめるべく、その成立過程の解明を試みたものである。

しかし、著者もいう通り、本書は「わが国工場法成立そのものよりも、むしろ工場法成立の社会経済的背景となった労働者階級の運動の実態と意義を明らかにすることに力点」（二頁）がおかれており、工場法そのものを全面的に取りあげているものではない。

一般的に工場法は産業資本確立期に成立するところに特色があるといわれるが、わが国で工場法が本格的関心事となりだしたのは、一八九六年以降のことである。著者によれば、工場法は「一方において『新しい社会問題』にたいする措置、鞭（治警法）にたいする飴として、他方において軍国の強兵策として、二面的効果を持つことになるが」（二七五頁）、政策主体及び資本にその成立を必然化せしめたのは、一八九七年以降展開された

「新しい社会問題」の抬頭であるという。そして、工場法が「政策主体と産業資本家との奇妙な取引のもとに」（二七九頁）すすめられ、しかも労働組合の組織的運動が欠如したところに成立した結果、その内容・性格は「蝉の抜殻に等しい」「不具化」されたもので、「労働者保護」よりも「工場主保護」の感さえあり、富国強兵策の一環としてもくろまれたにすぎないと説明する。

このような理解には、著者の社会政策論が根底に横たわっていることはいうまでもない。氏によれば「社会政策立法こそ労働者階級の闘争の産物であり、資本家階級や政策主体の自発的産物ではない」（一一頁）のであって、「労働者運動」こそ、その実現のための不可欠の根拠となるというのである。このような観点が著者に工場法の究明にあたっても、立法そのものより、その成立を必然化するという労働者運動に関心をむけさせることになり、本書のような構成をとらせたものと思われる。

その労働運動については、「労働組合なき労働運動＝近代的労働運動は考えられない」（一四九頁）という立場から、労働組合期成会の成立（一八九七年）以前の時期は労働運動の前史という理解をなし、本書でも「新しい社会問題」という性格をもつにいたる一八九七年以降の運動を中心に叙述するが、それも単に運動そのものを追うだけでなく、労働運動も社会主義運動もすべて工場法制定に結びつける叙述方法を展開するわけである。

しかしながら、著者も断ってはいるが、工場法の成立過程と労働者階級の抵抗の相関的把握が十分でないし、そのような相互関係を分離して叙述するという著者の姿勢自体に疑問を抱かざるをえない。そこから前述の工場法成立の抽象的論理が具体的分析で十分展開されずに終ることになっているように思われる。また氏は「社会政策立法を単なる抵抗にたいする譲歩ではなく、それを常に政策主体の階級的意図が反映した譲歩」（一二頁）と考えるところから「政策主体の権力構成を重視したい」といいつつ、本書ではそのような点が十分明らかにされていないように思われる。

個別的問題でも、幸徳秋水を革命的サンジカリストとする規定やアナキズム、サンジカリズム、無政府主義的直接行動論という用語の使用法、また岸本氏の社会政策論が学界の「支配的理論」という評価などにも問題があるように思われる。

しかし、以上のような疑問が残るとはいえ、本書はこれまで深い研究がなされなかった工場法に対し、その成立の社会経済的背景を究明しようとした労作であることにはかわりはなく、今後の研究に手がかりを与えてくれるものといってよいであろう。（青木書店・四〇年一二月刊・A5・三五五頁・一二〇〇円）

―小松　隆二―



# 中村勝己君学位授与報告

**報告番号**　乙第一七六号

**学位の種類**　経済学博士

**授与の年月日**　昭和四一年一〇月五日

**学位論文題名**　「アメリカ資本主義の経済史的考察」

**内容の要旨**

「アメリカ資本主義の経済史的考察」論文要旨

中村勝己

本論文はアメリカ資本主義の構造的特質を比較史的に解明しようとするものである。まず「産業社会学」や「企業者史」の最近の研究成果を紹介して、アメリカ資本主義成立期の担い手が、イギリス系のピューリタン的「中産的生産者層」であることを明らかにし、次いで「宗教社会学」的研究も、モルガンのような「善悪の彼岸」に立つ「経済的巨人」ではなく、「市民的中流社会」・「中流市民的企業家」・「中流、殊にそのうちにあってまたそのうちから、向上せんとする階層」すなわち興隆しつつある「産業的中産層」こそ近代主義の発展の担い手であり、禁欲的諸教派こそそのエートスの培養基であったと指摘していることを紹介した。

ついで、アメリカを地域的に南・中・北部に分け、土地制度と資本主義発展との内的関連をあきらかにしようとした。南部では「プランテーション」という大規模な奴隷経営が多く見られる故に、そこには大衆需要と結びつく資本主義的工業は発達し得ず、イギリス工業の海外市場であった。しかるに中部、とくに北部では、「タウン・システム」という土地制度がいち早く採用されたため、自由かつ富裕な農民層が広汎に創出された。この農民層のうちに混在した手工業者が急速に蓄積を重ね、経営を拡大して独立戦争期から一九世紀初頭にはマニュファクチュアから初期工場に発展しつつあった。他方このような生産者型の農村工業の発展に対応して、ボストンなどの仲継大商業資本がイギリスから力織機を導入し、一挙に一貫制大工場を建設した。この後進資本主義国に固有の商業資本の役割はその内部に前期性を色濃く遺していたが、同じく後進国たるドイツや日本の場合とは異なって、構造規定的役割を果し得なかった。農村工業は一八一〇～二〇年代の苦闘を経て、ギルモア力織機、やがては蒸気機関を備え、商人資本型綿業を圧倒するようになる。商人型綿業も一九世紀半ばにはその内部構成を改めて行く傾向を示す。こうして、生産者型綿業はまず、ニュー・イングランド農村の手工業を掃滅し、次いで西部を国内市場として把握し、一九世紀半ばまでには南部さえも自己の市場にくみ込むようになる。南北戦争はこうした北部産業資本の要求を示すのである。

このように、本論文はアメリカ資本主義ないし市民社会の勤労生産者的性格を解明せんとするものである。



**学位授与報告**